



【過去に縛られない未来】

〈第三世代〉が重ねる試行錯誤

「地域の力」で知名度上げた黒川温泉



かつて「半農半営」の湯治場だった熊本県の黒川温泉。交通の便が悪く、同じ阿蘇地域にある杖立温泉や内牧温泉と比べても無名だった。ところが一人のカリスマに影響を受け、景観などを含めて「黒川らしさ」を演出すると、全国屈指の人気温泉地となる。そこに至る創意工夫、そしてそれを土台としながらも現状に甘んじることなく新たな魅力を積み重ねようとする若い世代に焦点を当てる。

一つの旅館のような山間の温泉地

熊本空港から車で1時間強、阿蘇・外輪山の北方に位置する黒川温泉を訪れた。泉源が豊富で、一つの温泉地に7種の異なる泉質が存在する全国でも珍しいスポットだ。

せっかくなので、黒川温泉名物の湯めぐりを体験することにした。旅館組合・風の舎で「入湯手形」

黒川温泉の名を広めた「山の宿 新明館」の後藤哲也さんが設計した風呂。日本の温泉は10種の泉質が定められているが、黒川温泉には「単純温泉」「塩化物泉」「炭酸水素塩泉」「硫酸塩泉」「含鉄泉」「酸性泉」「硫黄泉」の7種がある



3 2

1

を買うと、26軒ある旅館のなかから好みの露天風呂を3カ所選んで入浴できる。温泉の効能を見比べて、どの露天風呂にしようかと迷うのが楽しい。旅館に入って入湯手形を見せると、宿泊客でなくてもとても温かく迎えてくれる。

黒川温泉の中心部は、30分もあれば歩いて回れるコンパクトな大きさ。素朴な田舎の風景以外、特別に目を引くものはないが、温泉を行ったり来たりするうちに、懐かしい故郷にいるような愛着を感じはじめ。次にまた来たら、「お帰りなさい」と言ってもらえそうなのこの雰囲気こそ、黒川温泉の魅力なのかもしれない。

江戸時代から湯治場として知られていた集落に、組合組織として黒川温泉観光旅館協同組合が設立されたのは1961年（昭和36）だった。しかし、黒川温泉が全国区で有名になったのはここ数十年のこと、それ以前は訪れる観光客も少なく、地図に名前すら載っていないような山奥のさびれた温泉地だった。



4

そんな黒川温泉が変わるきっかけとなったのが、後に観光の力スマとして名を遺す「山の宿新明館」の後藤哲也さんだ。若いころから独学で観光を学び、「来る人を驚かせる温泉をつくりたい」と自らノミをふるって敷地内の岩山を削り、10年かけて洞窟風呂を完成させた。また、田舎らしい風景にこだわり、宿の周りにわざわざ山の雑木を移植する。周囲の目は冷やかだったが、

この洞窟風呂が口コミで話題となり、新明館は1970年代、閉古鳥の鳴く黒川温泉で唯一、客足の途絶えない宿となった。1980年代になると、第二世代と呼ばれる青年部の若者たちが、後藤さんのアドバイスのもと、黒川温泉の変革に乗り出す。それぞれの宿が趣向を凝らした露天風呂を新設し、「露天風呂の黒川温泉」を打ち出したが、敷地の制約でどうしても露天風呂がつけられない旅館が2軒あった。そこで、この2軒の宿泊客も露天風呂を楽しむように「入湯手形」を発案。それが「黒川温泉「旅館」という地域理念につながっていった。

浴衣を着たカップルや親子づれが、田の原川に架かる丸鈴橋の上で足を止め、景色を楽しんでいる。黒川温泉の街並みは、どこを歩いても緑が多く、まるで山の風景を切り取った絵のようだ。実はこれ

第二世代がつくった 素朴な景観

1 中部地方から黒川温泉を初めて訪れた女性たち。田の原川に架かる丸鈴橋でこの露天風呂を巡るかを相談していた 2 東京に住む両親（後列）を黒川温泉に招待したという福岡暮らしの夫婦 3 後藤哲也さんがノミをふるい、10年かけて完成させた「山の宿 新明館」の洞窟風呂 4 黒川温泉の「入湯手形」（1300円）。26軒ある旅館のなかから3カ所の露天風呂に入れる 5 人が行き交う丸鈴橋。周囲の木々は山の雑木を移植したもの。言われなければわからないほど風景によくなじんでいる



5

ヒューマンスケールな
路地巡りも黒川温泉
の楽しみの一つ



ならではの景観をつくり上げてい
ったのだ。
秘湯ブームもあり、入湯手形が
メディアでもたびたび取り上げら
れると、「露天風呂の黒川温泉」の
名は全国に知れ渡り、多くの観光
客が訪れるようになった。ピーク
の2003年（平成15）には宿泊者
数40万人、推定入込客数120万
人を記録。入湯手形の販売数も最
大で約22万枚となった。

らの木々はすべて地域の人の手で
植栽されたものだ」と聞いて驚いた。
「今の黒川温泉の世界観は、第二
世代の先輩方が苦勞してつくり出
したものです」と、黒川温泉観光旅
館協同組合事務局長の北山元さん。
1986年（昭和61）、第二世代
が中心となって旅館組合の組織を
再編し、黒川温泉の景観づくりを
本格的に開始。上の世代の猛反発
を受けながらも、乱立し
ていた派手な看板を撤去
して、統一デザインの共
同看板を導入。近隣の裏
山にある雑木を、あえて
不揃いなまま植栽し、あ
たかもそこに昔から自然
に生えていたような木立
を形成した。こうして一
つひとつ手をかけ、素朴

若い力に期待した第二世代は、
早い段階で旅館組合の役職を第三
世代の若者たちへ譲り渡す。北里
さんは2011年（平成23）に初めて
組合の理事の職につき、2015
年（平成27）に理事長に選任される。
「このころ、黒川は賑わっている
ようでしたが、実際には客足にか
げりが見えはじめていました。若
い仲間たちの『何かやってやろ
う』という勢いの裏には、黒川温
泉はこのままで生き残れるのかと

今、黒川温泉を担っているのは、
30代から40代の第三世代。その中
心人物の一人である老舗旅館「御
客屋」代表取締役の北里有紀さん
は1998年（平成10）、21歳の時
に黒川へ戻り家業に入った。同時
期に同級生たちが続々と地元に戻
ってきて、皆で集まることが増え、
青年部の地域活動が活発になって
いく。

第三世代を突き動かす 将来への不安

「黒川の旅館組合は、入湯手形の
事業収益を柱に運営されています。
国や自治体の補助金に頼らず、経
済的に自立しているからこそ、主
体的に自由な活動ができるのが強
みです」と北山さんは言う。



第三世代の中心人物の一人である旅館
「御客屋」代表取締役の北里有紀さん



黒川温泉観光旅館協同組合の事務局
長を務める北山元さん



黒川温泉に変革をもたらした後藤哲也さ
んの人柄について教えてくれた「山の宿
新明館」支配人の川上謙一さん





第二世代が導入した共同看板。風景に溶け込むようにデザインを統一した



軒先に干してあるトウモロコシ。昔ながらの風景を再現

いう、将来への漠然とした不安がありました」と北里さんは当時の心境を明かす。

特にその危機感を強くしたのが、2016年（平成28）の熊本地震だった。旅館の被害は小さかったものの、道路の寸断や風評被害などもあり、

観光客が一時途絶えてしまった。旅館経営にとっても痛手だったが、組合の理事長だった北里さんは、地域の業者への支払いが激減していることに衝撃を受けた。

「観光業には衣食住のすべてが含まれていて、その先にはさまざまなお取引先があります。もし旅館がなくなったら、5年後、10年後にこの地域の人びとの暮らしはどうなるのか。自分たちは地域経済を支えているのだと、責任を痛感しました」

黒川らしきことは 変わりつづけること

黒川温泉を次の世代へ引き継いでいくためには、世の中の変化に合わせ、旅館のあり方もまた変えていかなければならない。

黒川温泉だからこそ打ち出せる価値とは何か考え、導き出した一つの答えが「食」を軸とした地域の循環システムだ。

「地域の環境や経済のサステナビリティと、食を通じた一人ひとりの健康や幸福。この両者を横断して満足させることができるような循環のしくみを、黒川温泉から発信していきたい」と言う北里さん。

黒川温泉は2030年ビジョンとして、「日本の里山の豊かさが循環する温泉地」を目指すことを宣言した。具体的な取り組みとして、旅館で出る食品残さ（生ごみ）からつくった堆肥で野菜を育て、旅館の料理として提供する「黒川温泉一帯地域コンポストプロジェクト」や、地元産のあか牛を地元で消費することで阿蘇の草原を保全し、地域の畜産と農業の循環を守る「あか牛つぐもプロジェクト」など新しい試みも動きはじめている。

もう一つ、力を入れているのが人材育成だ。黒川温泉の旅館従業員は、20代、30代の若者が多い。「旅館業は、キャリアパスが描きにくく、残念ながら離職率が高い業種です。とにかく宿にとって一番大切なのは人材です。『地域が人をつくり、人が宿をつくる』と

いう信条のもと、私たちは各旅館任せにするのではなく、地域としてキャリアサポートをしています」と北里さん。

次世代リーダーを育成する「黒川塾」は、各旅館従業員の若手リーダー候補を対象に、地域のことを深く学びながら、仕事のなかで自らやりたい姿を見いだすための研修プログラム。今年3年目に入っている。

もちろんうまくいくことばかりではない。例えば、外部の人との関係を拡大したいと考え、地域づくりへの貢献に応じて特典を付与する「第二村民構想」を打ち立てたが、人の思いをルール化するのには難しく、この制度は休止した。

「ほかにも、消えていったプロジェクトはいくつもあります。でも頭で考えてできない理由を並べるより、とにかくやってみて、そこから柔軟に次の方向を見極めるのが、黒川らしいやり方だと思っています」

この北里さんの言葉のように、若い世代が変化を恐れずに挑戦しつづける黒川温泉。観光カリスマ・後藤哲也さんの精神を受け継いだその姿勢に、これからの温泉地の可能性を見た気がした。

（2022年9月4〜5日取材）



6「山の宿 新明館」で露天風呂を楽しみ、自分たちが泊まる宿に戻る家族 7森のなかにうずもれているような黒川温泉の風景 8・9第三世代が旅館従業員の次世代リーダーを育てるために開講した「黒川塾」 8・9提供：黒川温泉観光旅館協同組合



【過去に縛られない未来】